

異世界にて瘦やせる想いなのです

登場人物
紹介

ローウェイ

神官長。
ちまきを可愛がっている。
かなり乙女な一面も……

バショウ

馬に轢かれそうになった
ちまきを助けてくれた。
謎多き人物。

ローレンス

リーベルトに絶対の
忠誠を誓う側近。
DSで鬼畜。

シン

ちまきの護衛役。
いつでもどこでも
何かを食べている。

リーベルト

メイストラシア王国の第三王子。
自身の「成人の儀」のため
ちまきを召喚したものの、
美人じゃなくてショックを受ける。

篠原ちまき

リーベルトの「成人の儀」のため、
異世界に召喚された
ぼっちゃり系残念女子。
けれど儀式の衣装が入らず、
ダイエットすることに……

目次

プロローグ	準備運動は大切です	6
レッスン1	お腹 <small>なか</small> につまっているのは愛とか希望です	10
レッスン2	減るのは財布の中身ばかりなのです	73
レッスン3	走るより転がる方が速そうです	127
レッスン4	脂肪にそっと発破 <small>はっぱ</small> をかけます	189
レッスン5	異世界にて痩 <small>や</small> せる想いなのです	254
エピローグ	整理運動も忘れずに	290

プロローグ 準備運動は大切です

夜空では、まあるいパンケーキのようなお月様が輝き、皓々と夜道を照らしている。

「へ〜ぷちん」

ズビズビと流れる鼻水をすすり上げて、はふんと息を吐く。

白い吐息に寒さを強く意識してしまい、篠原ちまきはぶるりと身体を震わせる。

ちまきは、ぼてぼてとのんびり家路についていた。

もっちりしたほっぺに、丸い輪郭。つぶらな瞳に、ふつくりした唇。そして、少しだけ低めの鼻。幼い顔立ちで、全体的に丸みを帯びたフォルムのせいか、ちまきは二十二歳になっても、女としての色香だとかそういうものから縁遠いところにいる。

マシユマロのようにふわふわのほっぺを林檎のように赤くしたちまきは、こういうタイプが好み人間には、たまらなくかわいらしく見えるだろう。

夜中の二時、しかも近所のコンビニに夜食を買いに来ただけ……という気軽さのせいで、今は完全ノーマイク。母親譲りの栗色のふわふわした髪を肩の上で揺らし、少し邪魔になってきた前髪はシユシユでちょんまげにしていた。

最後に処理をしたのはいつだったのかさえ覚えていない眉毛が、存在感を放っている。

それだけでなく、高校時代のジャージに全身を包み、その上には、にゃんこ柄の半纏。

勝手に拝借してきた母親のサンダルを履いている彼女の姿は、二十二歳のうら若き乙女とはどうもてい思えないガツカリ加減である。けっしてオシャレに興味がないわけではないのだが、何をどうやったらいいのかわからず、結局いつも自分が一番楽な恰好をしてしまう。

日中ならばもう少しだけ気を使うのだが、今は完全に気が抜けていた。

ほんわかとした笑みをたたえながら、ちまきは本日の戦利品に思いを馳せる。

冬の寒さだけでなく、小さな幸せにほっぺを染めていた。

彼女はコンビニで買った、蒸したてふかふかの肉まんとあんまんを持っている。

ちまきは幸せだった。特に大きな幸福を感じているわけではなかったけれども、大好きな両親がいて、かわいい弟がいて、大切な友達がいる。就職活動はうまくいっていないし、他のアルバイト仲間が就職活動を理由に辞めていく中、自分はそれを言い出せずにいるし、彼氏もずっといない。それでも、小さな幸せを大事にしながら過ごしていた。

子供のころからおっとりのんびりした性質だったためか、いつもあらゆることに置き去りにされがちだったちまき。就職活動だって、恋愛だってそうだ。様々な物事に対し、ちまきはみんなのよう要領よく動くことはできないし、自分から勇気を持って飛び込むこともできない。

他のみんなが脇目もふらず必死に走っている横でばえばえ微笑み、よおし、やるぞお〜！ とようやく自分に気合いを入れたころには、たいていのことは終わっている。



好きだった先輩には彼女ができて、いいなと思う就職先からは友達が内定をもらっていた。とはいえ、いつも出遅れてしまうのは昔からなので、今さら気落ちはしない。ただ、ほんの少し寂しくなるだけだ。

その寂しさも、買ったばかりの夜食について考えれば、ふわふわと消えてしまう。食べ物で呆気なく心が軽くなってしまいう単純さを、ちまきは自分の数少ない美点だと思っていた。心躍る夜食にホクホクな気分、自宅に一步、また一步とぼてぼて近づいていく。そして家の門扉を越えようとした瞬間。

「ん？」

ほんのわずかな違和感が、ちまきの身体を包んだ。誰かに肩を叩かれたとか、名前を呼ばれたとか、いきなり天空に身体を引っ張り上げられたとか、空間が捻じ曲がったとか——そんな顕著な変化ではなかったと、後々のちまきは語る。

まるで自動ドアをぐり抜けた時のような——一つの区切られた空間を、何気ない日常を、ただなんの感慨もなく踏み越えたような感覚が、一瞬だけ、ちまきの肉体を包み込む。

それが、始まりであった。

「え？」

目をパチクリ。持っていたビニール袋が手からすべり落ちる。

目の前にあったはずの家が、いつの間にか消え去っていた。いや、それだけではない。家に加え見慣れた景色もすべて消え去ったかわりに、まったく知らない光景が目飛び込んできた。

レッスン1 お腹につまっているのは愛とか希望です

見慣れた町並みが消えた時、一番にちまきの目に入ったのは、燃えるような炎。

——否。

炎だと思っただけは、人間の髪である。少し長い髪を後ろに流した、長身の青年が立っていた。ずいぶん背が高く、横幅もある。かといって、肥満体なわけではない。綺麗に鍛え上げたアスリートのような、しなやかな肢体だった。日本では珍しい、褐色の肌。あまりなじみのないゆつたりとした、どこか高級感漂う衣服を身につけている。

髪の色よりも色素の薄いローズピンクの瞳は、百獣の王を思わせるほど獠猛で鋭い。

この若い男からは、恐ろしいまでの気迫を感じる。彼に睨まれたら、やや気の弱いちまきなど、一発でふう〜と意識を失ってしまいそうだ。

彼の野性的な美貌には現実感がともなわず、ちまきは言葉を失い直立不動になる。

しかし目だけはなんとか動かすと、赤髪の青年の周囲にも人がいることに気がついた。

背の高い銀髪の男が二人。小柄な黒髪の少年が一人。

銀髪の二人組は髪の長さや身体つきに差異が見られたが、どちらも美形である。

初めに目に入った赤髪の青年とはまた違う——あちらが雄々しくてワイルドな美貌だとしたら、

こちらの二人は美術品のように洗練された美貌だった。

小柄な少年は美醜をどうこう言う前に、表情が一切変わらないことが気になる。

視線だけで、ちまきは周囲をぎこちなく探る。

青年たちが立っている場所を中心にぐるりと見渡してみると、自分たちがいるのが非常に広い空間であることがわかった。

室内ではあるものの、広過ぎて一つの部屋と称するには戸惑いを覚える。

大学の大讲堂に似ているような気もするが、どこか違う。もっと近いたとえを探し、結局、思いつかなかった。ただぼんやりと、ここが普通の場所ではないことだけは理解する。

同時に、自分が青年たちから注目されていることにも気づいた。

なんだか知らないが、すぐく見られている。ちまきも、彼らをこれでもかというくらい見ているのだが、その自覚はない。互いに穴が開くほど見つめあって数十秒ほど経ったころ、ようやく赤毛の青年が厳かに口を開いた。ちまきはなんとなく、身構えて彼の言葉を待つ。

「チェンジ」

彼は一言そう言った。耳当たりのよい声だ。不機嫌丸出しの顔ではあったが。

ちまきには、その言葉の意味がわからなかった。しかし、青年の声をきっかけに、ちまきの身体に少しだけ自由が戻る。ロクに働かない頭で、特に何も考えられないまま、後ろをふり向いた。すると、つい先ほどまであった、お向かいの中村さんのお宅がなくなっている。

かわりにあったのは、宙に浮かんだ巨大な水たまりだった。

水たまりというよりも、水の塊かたまりといった方が正しいのかもしれない。
 銭湯せんとうの浴槽よくそう一つ分くらいの水量はありそうな塊が、ふよふよと空中に浮かんでいる。
 なんの装置もなく、自然現象でそうなるわけがない。

しかしその時のちまきは、ああ水たまりが浮かんでるすごいなあ、くらいしか考えられなかった。
 「いやいや、ない。アレはない。まさか、そんな……うっかり、違ちがうのを召喚しょうかんしちまったんじゃないのか？」

赤髪の美青年が早口で言う。日本語だ。どうやっても日本人に見えないのに、日本語をしゃべっている。今売り出し中の外国人タレントさんかしら。現実逃避気味に、ちまきは思った。

赤髪美青年は、自分をガツツリと見ている。

半笑いで、口元をヒクつかせている様子から、彼がちまきの存在を否定していることはわかった。
 あの青年は自分に、なんらかの理由で失望している。そしてそれを隠す気はないらしい。

(この人、苦手だな)

ちまきは胸の中でぼつんと呟つぶやいた。

やがて、静かに意識が沈んでいく。ちまきの思考は停止し、身体から一気に力が抜けた。

「ごちんと、非常に痛い音が聞こえた気がするが——意識を手放したちまきには、後頭部にできた大きなたんこぶのことなど知る由よしもなかった。

「ババを掴つかまされましたね、我が君」

「王子、ドンマイ」

「バ……ッ。なんと罰当ばちあたりなことを言うのです、ローレンス。不敬ふけいにもほどがありますよ。今の発言は取り消しなさい。それからシン、あなたもドンマイとは何事です。まるで昨日の召喚が失敗だったみたいではありませんか」

……ごちゃごちゃと、何やらうるさい。種類の違う声が三つ聞こえる。

(……………ん……………?)

ゆっくりと、ちまきの意識が浮上していく。耳に入ってくる言葉の意味は理解できないまま、ぼんやりと薄く目を開き……そっと閉じる。身体が重く、まだ眠っていたかった。

頭の後ろが、痛い。ちまきは二度寝しそうになって、すぐにありえない事実に気づいた。

(え!? な、なんで私の部屋で男の人の声がするの!?)

何がどうなっているのか知らないが、自分の身に何やら理解不能なできごとが起こっていることだけは、それとなくわかった。

そういえば寝ているベッドも、いつもと感触が違うような……

まるで初めて泊まるホテルのベッドみたいに、身体になじんでいない。窓からは光が差し込み、鳥のさえずりが聞こえるので、今は朝なのだろう。

それに、今朝はずいぶん暖かい。ここ最近では冷え込む日が続き、ベッドの中でも寒いなあと思うことが多かったというのに。

複数の男性の声。なじみのないベッド。暖かい朝。

頭が混乱する。タヌキ寝入りを続けながら、背中には嫌な汗がダラダラと流れた。

自分の置かれている状況が、まったく把握できない。夢だと思いたいが、そう思い込むには、あまりにもすべてがリアルだ。

「いや、失敗だろ。どう考えても失敗だろ。間違えて、別人を呼んだんじゃないのか？」

また一つ、声が増えた。世界中の不幸をかき集めたような悲痛な声に、ちまきはギクリとした。

この声には、聞き覚えがある。

意識をなくす前に聞いた、あの青年のものだ。

「本当にコレなのか？」

同じ声が、誰かに尋ねる。

「間違いありません。この方です」

穏やかな性質を思わせる、柔らかな男性の声が是と答えた。

「嘘だろ……コレが……コレが、長年、俺が夢見続けてきた乙女、だと……信じらんねえ……だから神なんか信用ができないっていうんだ……クソつたれ！」

悲嘆に暮れた声の主は、最後に罵声を上げた。

「殿下。あなたも何を言っているのです。そもそも、何が不満だと？ あの春の日差しを思わせるふくふくとした頬、花の蜜をたらしたような唇……残念ながら今は閉じられています。わたしは小鹿のように澄んだ美しい瞳をしっかりと見ました。ええ、脳裏に焼きつけましたとも。それに、緩やかに波打つ栗色の髪の毛の、魅力的なこと。なんとも愛らしいお嬢さんではありませんか」

穏やかな声が小さい子供をたしなめるように言うと、妙な沈黙が落ちた。

タヌキ寝入りをしているちまきにも、周囲に満ちた微妙な空気が伝わる。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」なぜ、三人そろってかわいそうなものを見るような眼差しでわたくしを見るのです？ って、無言でわたくしの肩を叩くのはやめなさい、シン」

どうやら穏やかな声の主の意見は、その場にいる人間たちから賛同を得られなかったようだ。

——どうしよう。今のところ何か危害を加えられそうな気配はないけれども、これから自分がどういう行動を取るのが一番正しいのか見当もつかない。

そもそも、これは本当に現実なんだろうか。昨日、意識を失う直前にあったできごと、すべて夢の一部なんじゃないかと思いたくなる。

だって、あんな——あんな夢みたいなこと、現実起こるわけがないのだ。

目の前にあったはずの家がなくなつて、かわりに知らない光景が広がっているなんて。

「ローリー……お前の弟、大丈夫か？ 一度腕のいい癒士に連れていった方がよくないか？」

「そうですね。基本的にダメだと思えますが、まあ今さらです。我が君が愚弟のことでお心を悩ませる必要はありません。ウエイは、今までどんな見目麗しい女性に言い寄られても、愚鈍さゆえにまったく気づかず、そのすべてを純粋なる友好だと勘違いし続けてきました。そんな馬鹿が、曲

がりなりにも女性にカテゴライズされる人間に興味を示したことに、兄として安堵あんどしているところ
です。実はこっそりと、こいつは男色だんしよくの気があるんじゃないか気持ち悪いと心の距離を置いており
ましたからね」

ローリーと呼ばれた声は、すらすらと遠慮なく毒舌どくせつを吐く。

「お黙りなさい、ローレンス。だいたい殿下馬鹿のあなたに詰なむられるいわれはありませんよ。そも
そもわたくしを愚弟ぐていと言いますが、こちらだって、いじめっ子ローリー」などと学舎生時代に悪名
を馳はせたあなたを兄に持ち、肩身の狭い思いをしてきたのですよ」

「おやおや、懐かしい。十五年も昔の話を持ち出すとは。年を取ると過去を述懐じゆつかいしたくなるとい
うのは、本当のようだな。お前も充分に、オッサンの仲間入りだ」

「わたくしと同じ年齢であることを、どうやらお忘れのようで」

「俺とお前を同レベルで考えてほしくはないな」

「なんですかそれ」

「おいコラ。兄弟喧嘩、勃発ぼつぱつさせてんじゃねえよ。今はそれどころじゃねえだろうが」

ヒートアップしそうな二人を、赤髪の青年だと思われる声が制する。

「申し訳ありません、我が君」

「……申し訳ありません、殿下」

二つの声は、素直に謝罪した。

「しかし見てください、我が君。愚弟の、このだらしない顔」

「……失敬な。そもそも、わたくしは聖職者です。女性に俗ぞくな感情など、抱いだくわけがないで
しょう」

その時、平淡な少年の声が交じった。

「なるほど、男性には抱かくつてことですね。怖いです」

「真顔で恐ろしいことを言うのはおやめなさい、シン」

穏やかな声はコホンと咳払いをし、続ける。

「わたくしは客観的に見て、とても愛くるしいお嬢さんではないかと言っているんです」

「「「えー」」」

今度も賛同は得られなかったようだ。先ほどよりも露骨ろこつに否定されている。

なんだかよくわからないが、盛り上がっている。ちまきは勇気を出して、うっすらと、ううっ
すらと目を開けた。すると、見覚えのある四人組がベッドの近くにたむろしている。

……夢じゃない。やはり、昨日の四人組だ。

物語から飛び出してきたような美形たちと無表情な少年が、自分を取り囲んでやいのやいの言っ
ている。

ヤバイ。どうしよう。あらゆる意味でどうしよう。てゆーか、何がどうしてこうなった。

「あ。起きたみたいっすよ」

うのように悩んでいる間に、気配でも悟られてしまったのだろうか。

淡々とした少年の声が、ちまきのタヌキ寝入りをバラしてしまった。

バレた！ ヤバイ、バレた！

ちまきは軽くパニックになってしまい、解決方法もまったく浮かばなかった。しつかりと十秒ほど迷いはしたものの、逃げられない状況だと覚悟して、おそろおそろ目を開けてみる。

「よお、起きたか」

最初に目が合ったのは、赤毛の美青年だった。一番近くにいたということもあるが、彼の赤い髪はどうしてもちまきの目を引く。

初めて見た時にも思ったが、ずいぶんと体格のよい青年だ。身長も百八十七センチを軽く超えているだろう。その身体つきは、プロのスポーツ選手などに通じるものを感じた。

印象的な赤毛の髪に、ローズピンクの瞳。そして褐色の肌。

年は自分と同じか、少し上くらいだろうか。年下ということはあるまい。隠しきれない俺様オーラが全体的に漂っている。

加えてそれと同じくらい流れしになっている男の色香に、ちまきの口元がヒクついた。

必要最低限しか男性と交流をしたことのないちまきは、見知らぬ男性、特に美形という人種が非常に苦手だった。遠くから見ると分には大好きなのだが、近くに来られるとアウト。

恥ずかしくなって、全力で逃げたくなるのだ。

「おい？ ………………なんだ。口がきけないのか？」

赤髪の青年が不機嫌な顔をズイツと近づけてくる。

ひあああああああああああああ！

悲鳴を上げたかったが、声にはならなかった。

動揺したちまきはベッドの中でおののき、ズサササッ！ と距離を取る。ちまきが距離を取っても十二分に、ベッドは広がった。

「殿下。そのような怖い顔で近づいたら、誰だって怖がりますよ。愛らしいお嬢さん、ご安心ください。この方はこういう顔つきですが、身元のハッキリした高貴な方。けっして、怪しい人物ではないですよ」

慈愛に満ちた穏やかな声の方を向くと、まっすぐな銀色の長髪をたらしした美人が立っていた。年齢は三十前後といったところ。身長こそ横に立っている赤毛の青年より少し高いが、身体つきは細めである。男性であることはわかるものの、たおやかな雰囲気の子か、美丈夫というよりも美人という言葉を使った方がしっくりとくる。

白を基調にした見慣れない衣服に身を包んでおり、ファンタジー系のゲームで神官などをしていそう。衣服の袖や裾には紫色の刺繍が施されている。

「俺の顔のどろろが怖いってんだ」

「鏡をご覧くださいませ。眉間にシワが」

たおやかな男性から冷静に切り返され、赤髪の青年はむうと低くうなる。

その間、ちまきは残りの二人をバレない程度にこっそりと観察した。

神官のような人物のすぐ横に立っているのは、同じく銀髪の男性だった。こちらは短く切った髪をピシッと撫でつけ、眼鏡をかけている。黒の執事服らしき衣類を身にまとい、手には白い手袋。

上着のポケットから、細い鎖の伸びた懐中時計みたいなものをぶら下げています。

今いる中で一番近寄りたいのはこの人物だと、ちまきは本能的に悟った。赤毛の人も怖いですが、それ以上に彼からは、何か空恐ろしいものを感じる。この人には、できるだけ関わってはいけません……。ちまきはそつと視線をそらして、残りの一人を見た。

黒髪に黒い瞳。十代半ばに差しかかるころだろうか。他三人と比べて身長も低く、おそらく自分よりも少し高い程度に違いない。顔立ちも目立つほどの美形ではなく、ごくごく普通の少年である。目に光が一切なく、ひたすら無表情であることが気になるものの、美形に耐性のないちまきとしては、自分と同じ平凡な容姿の少年に、少しだけ親近感を抱いた。

人物の観察が終わると、次に気になるのは自分が置かれている状況だ。まず、部屋の広さは……かなり広い。ここだけで、ちまきの実家がまるごと入りそうだ。全体的に白を基調としており、カーテンや小物はピンク色のものが多い。

大きな窓にはピンク色の薔薇の模様のカーテンがかけられ、幾重にも薄生地うすきじの白いレースが重ねられている。

カーテンの模様だけではない。部屋のあらゆる家具に薔薇やら蝶ちようやらがあしらわれており、かなり少女趣味……いや、非常にかわいらしい内装になっていた。

ふと気づけば、自分が寝ていたベッドにもレースの天蓋てんがいがついている。シーツと毛布は白だったが、三つある枕のうち二つはピンク色だった。なるほど……。こういうのを姫系というのか。

それにしてもこの部屋、誰の部屋なんだろう。男性四人のうちの誰かの部屋だとは思いたくない。

個人の趣味をとにかく言いたくはないし、乙女心はくすぐられるが、男が好むには少々……いや、かなーりかわいらし過ぎないだろうか。

「あ、あの……」

黒髪の少年以外の三人は何やら話しあっていたが、ちまきは勇気を出して声をかけた。

最初にちまきの声に気づいたのは、黒髪の少年だった。

「何？」

黒髪の少年がそう答えたことで、他の三人の意識もちまきへと戻ってきた。

全員に見つめられて、ちまきはビクッと身体を震わせる。

手元にあった毛布の端を、知らず知らず強く握りしめてしまう。

四人が、ちまきの発言を待っているということはわかった。毛穴にまで気づかれてしまいそうな熱視線にクラクラするが、女は度胸。身体中の勇気をかき集めて、ちまきはもう一度口を開いた。自分の身に起こった事情を少しでも知らなければ、話にならない。

「お………おはようございます」

一瞬、部屋に妙な空気が満ちる。ちまき自身も、しまったと思った。

確かに目覚めの挨拶あいさつとしては正しいが、この状況下での第一声ではないだろうと、ちまきは心の中で涙を流しながら自分に突っ込む。

「……………おはよう」

眉間にシワを寄せてはいたが、赤髪の青年が真っ先に答えてくれたことに、ちまきはほんの少し

救われる。他の三人もそれぞれ挨拶を返してくれたので、ちまきはぎこちない笑みを浮かべて会釈する。どんな時でも笑顔は大事よ、困った時こそ笑いなさいという母の教えは、ちまきに身についた大事な習慣だ。

美人だと言われたことはあまりないが、笑顔はかわいいとアルバイト先のお客さんに褒められたことがある。ただし今の状態はイレギュラー過ぎて、浮かべた笑みが引きつっているという自覚はあった。

「それで、頭は大丈夫か？」

赤毛のどんでもないイケメンさんに尋ねられ、ちまきは返答に窮した。

頭……後頭部がズキズキするので、おそらくそれについて聞いてくれたのだろうが、聞き方に他意を感じる。いや、もしかしたら、本気で頭の中身が大丈夫かと尋ねているのかもしれない。

だったら、どう答えるべきだろう。大丈夫だとも大丈夫じゃないとも答えにくい。

「殿下。それでは、別の意味に聞こえますよ。昨夜、強打した後頭部は大丈夫か、と尋ねなければ」

長髪の男性が呆れたように言うと、眼鏡の男性は冷やかに口を開いた。

「まあ、どちらでもいいんじゃないか。特にかしこそうな顔はしていないし」
ガーンツ。

ちまきは密かに傷ついた。初対面の相手に指摘されるほど、自分は間抜けな顔をしているのだろうか。確かにさほどかしこい方ではないが……

「ローレンス。いい加減になさい。次に不敬なことを言ったら、その口を縫いつけてしまますからね」

「そしたら、俺はお前の手足を縛り上げて道端に放置してやるよ。全裸にしてな」

見えない雷が二人の間で鳴り響いた気がして、ちまきは怯えた。この二人、ものすごく仲が悪い。間違いない。互いに親の仇を前にしたように睨みあっている。鳥肌が立ちそうなほどの殺気だ。

「あの二人は放っておけ。いつものことだ」

「ああ見えて、実は仲良し」

赤髪の青年の言葉を受ける形で、黒髪の少年が一人うんうんと首を縦にふっている。

少年は相変わらず無表情。どうやら、この顔がデフォルトらしい。

「それで、身体に異常は？」

「……あ……えと、その……頭の後ろが少し痛いだけで……他には……」

特に異常は感じられなかったのでそう言うと、赤髪のイケメンは鷹揚にうなずいた。

「まずは、自己紹介しておくか。俺はリーベルト。リーベルト・ウィル・メイストラシア。ここメイストラシア王国の第二位王位継承者だ。その長髪がローウェイ、眼鏡がローレンス。で、黒髪の子ジグがシン。みな、多少内面に問題はあがるが信用はおける人間だ。安心しろ。お前に危害を加えるつもりはない」

……内面に問題があるって、本人たちの目の前で言っているのかしら、とちまきは思いつつ、ぎこちない笑みを浮かべる。

タヌキ寝入りをしている間に聞いた「ウェイ」「ローリー」というのは、ローウェイとローレンスの愛称だったわけだ。

「……あの、私は篠原……篠原ちまきです」

小さな声で自己紹介をしながらも、ちまきの頭の中では赤髪の青年リーベルトの言葉がグルグルと回っていた。彼はここをメイストラシア王国だと言った。国という単位を使ったことからして、ここは日本ではないのだろうか。

ちまきは地理や歴史について詳しくない。とはいえ、それは一度も聞いたことのない国名だった。「ちまき………かわった名だな……。ああ、ちまっこいからか」

一人納得しているリーベルトに「いや違うから」と突っ込みを入れたかったが、実行に移せるほどの余裕はない。

ちまきの名前は、そのまま食べ物のちまきに由来する。ちまきは、端午の節句の邪気払いに使われていた食べ物だった。米を寄せ集めて作るちまきのように、周りに人を集め、お世話になった人の悪い気を払って癒せるような人間になってほしい、という願いが込められた名前なのである。けっして、母親が妊娠中にちまきばかり食べていたからではない。

「……あの、メイストラシアって……どこですか？　ここ、日本じゃ……ないんですか？」

ちまきは声を震わせながら尋ねる。嫌な予感に、顔が強張るのがわかった。ここが日本国内であることを必死に祈りながら、リーベルトの返答を待つ。自分がどうやってこんなところに来たのかはわからないものの、国内であればどうにか家に帰ることはできるはず。だ

が、そうでないとすれば……

すがるような眼差しを向けるちまきに、リーベルトは無情にも答えた。

「残念ながら違う」

はつきりと否定され、背筋がゾクリとする。頭の中が一瞬白くなり、ちまきは息を呑む。

一瞬か、それとも数瞬か。呼吸すら、止まった。

「二ホン、というのがお前の故郷か。ここは、お前の住んでいた世界とは違う。お前にとってはずう——異世界、と言った方が正しいのかもな」

異世界。

ちまきの意識はふうふうと遠のいた。

起こしたばかりの上半身が崩れるように倒れ、べしよりとベッドに沈み込む。

「お、おい！　おい！」

近くて遠い場所から声がする。鼓膜にぶ厚い布でも当てられているかのように、声が不明瞭で聞こえにくい。しかし頬に痛みを感じて、ハッと意識が戻った。

「夢？」

ぼーっとした顔で願望を呟く。ちまきは力の入らない腕で、自身の身体を支えるようにベッドに座り込んだ。

ジンジンとしびれるように痛む頬に手を当てる。いつもよりさらにもっちりしている気がするのは……気のせいか。

「現実だ。……………おい、大丈夫か。なんか視線が定まってるぞ」

「……………ッ！ これはいけない。誰か、気つけをこへ」

慌てたように人を呼んだ声は……長髪の人、ローウエイのものだったような気もするが、定かではない。

ちまきの視界は、グルグルと回っていた。

バタバタと人の気配が増えて、すぐに消える。どうやら、気つけとやらを誰かが持ってきてくれたらしい。頭の片隅の、妙に冷静な部分でそう判断する。

ベッドの上にいるというのに、船上のようにグラグラと動いているみたいに感じた。

全身が寒いのは、血の気が引いているせいだと、その時のちまきにはわからなかった。

渡されたティーカップを震える手で受け取る。しかし、手が震えて、うまく持てない。

「……………世話のかかる」

小さな舌打ちが聞こえた。その声の持ち主である赤髪の青年は、震えるちまきの手に自分の手をそっと重ねて、一緒にカップを持つてくれた。

「飲め。気が休まる。味も保証する」

ぶつきらぼうだが、頭の中にスツと入る静かなトーンの声だった。

不思議と、ストンと胸の中に落ちてくる。ああ、大丈夫なのかとちまきは思った。

この声が、この手が今の自分を支えてくれているのだと思い、言われた通りティーカップを口に運んだ。

花のような甘い香りがふわりと鼻腔をくすぐる。

トロリとした液体はほんのり温かく、ゆず蜂蜜に似ていた。舌に柔らかくなじみ、喉を通り抜けて胃に落ちるころには、身体にじんわりと効力が広がる。

「おいしー」

ほっとした気持ちで呟く。ちまきは活力をやんわりと取り戻し、周囲を改めて見回した。知らない美形男子たち。その顔にはそれぞれ別の表情が浮かんでいる。

不機嫌の中に心配をにじませた顔、とにかく心配そうな顔、面倒くさそうな顔、特に変化の見えない顔。それらの顔を視界に捉え、続いて自分の手に握られているカップに目を落とした。

すると、褐色の手が目映ってドキリとする。彼の手はまだ自分の手に重ねられていた。

ちまきの視線に気づき、赤髪の青年は静かに手を離す。ホッと安心すると同時に、奇妙な寂しさを覚えた。

「動揺するのは無理ありません。お氣を確かに」

「……………はい」

芳りの言葉に涙腺が緩む。長い銀色をさらりと流したローウエイという男性は、とても優しくな眼差しでちまきを見つめていた。綺麗な人だ。優しい人だ。人間、第一印象通りとは限らないと知っているけれども、そうであると信じたくなるような真摯な眼差しだった。

じんわりと目頭が熱くなり、ちまきは浮かんだ涙を手の甲で拭いた。

泣きたくなかない。泣いていても、事態は変わらないのだから。それなのに、涙が出てくる。

自分はいったいどうして、こんなことになったのだろう。

ただ、夜食を買いにコンビニへ行っただけなのに。何か特別なことをしたわけでもない。

宇宙船に拉致された人たちはみんな、こんな思いを抱くのだろうか。ちまきは、いまだ一度も会ったことのない宇宙船拉致被害の人たちに、わけもなく同情してしまった。

「心配せずとも、元の世界には戻れますよ」

悲嘆に暮れるちまきに、眼鏡の男性は事も無げに言い放った。ちまきは弾かれたように顔を上げると、

カップの中の液体が、波紋を立てた。

やや突き放した口調ではあったが、今、帰れると彼は言った。確か名前はローレンスだったか。

彼は、ぬれたナイフのような紫色の瞳をちまきに向けている。その決定的な冷たい眼差しに、ちまきは怯えた。

「おや、お客人。どうして震えているのです。俺の顔に何か問題でも？」

問われて、ぎくしゃくと首を横にふる。さすがに顔が怖いですと正直に言えるほど勇氣はないし、失礼きわまりない発言である。

怯える自分を見て、ローレンスの目がキラんと楽しそうに光ったのは気のせいだと思いたい。

「ローリー。お前、怖がられてるから、少し離れてろ。話が進まねえ」

「おや。仕方がありません。我が君の言葉ならば従いましょう」

まだ何かしかけてきそうな雰囲気はあったが、ローレンスはローベルトの言葉にあっさりと従い、

一礼して部屋を退室した。

どうやら彼は、このローベルトという青年に従服しているらしい。

そういえば、ローベルトは王子様だとか言っていたような、いなかったような。

「アレで割といいところもあるんだ」

ローベルトのフォローに、ちまきは半笑いであなづいて流す。彼らには悪いが、とてもそうは見えなかった。他人からの頼みごとに弱いちまきは、面倒な人間に対するセンサーがバッチリ備わっている。この人は厄介そうだなと思っただけで、口クでもないことにちまきを巻き込むのだ。ちまきはそんな相手に対しても、強く出られない。そのため、そういう人間にはできる限り最初から関わらないようにしてきた。

「それで、話はどこまででしたか？ ……ああ、元の世界に戻るってところまでか」

ちまきは期待を込めて、こっくりとうなずく。

もうこうなったら、ここに来た理由なんかどうでもいい。早く帰りたい。

「結論から言えば、お前は元の世界に戻る。戻る方法は、ある」

「ほ、本当に？」

「歴代の乙女はみな…いくつかの例外を除いて無事に元の世界に戻ったと、歴史書には書かれている。その方法は、ローウェイが知っている。お前が俺たちの手伝いさえしてくれば、無事に戻すと約束しよう」

「お手伝い？」

オウム返しに聞くと、リーベルトはうなずいてローウェイの方を向く。

リーベルトの視線を受けて、ローウェイが説明をしてくれた。

「あなたをこの世界に呼んだのは、わたくしです。ちまき殿には大変申し訳ないのですが、わたくしたちのお手伝いをしていただきたいのです」

ローウェイは自身の胸に手を当て、すがるような眼差しを向けてきた。繊細な美貌が際立ち、さりと流れる銀色の髪の色に美しさにため息が出そう。

「あ、あなたが私を、この世界に？」

「ええ。わたくしは、このメイストラシア王国の神官長。実は近日、ここにおわすリーベルト殿下が成人の儀式を行います。その儀式には必ず、異世界の乙女のご助力が必要なのです。メイストラシア王国歴代の王族たちは、儀式の際に我ら神官の力を使い、異世界から選ばれし乙女をお呼びしてまいりました。儀式が無事に終わりましたら、ちまき殿の御身を、すみやかに元の世界にお届けするとお約束いたします。ですので、どうかわたくしたちの願いを聞き届けていただきたいのです。いきなり、このような不躰な話をする非礼は重々承知しておりますが、なにとぞお願い申し上げます」

ひたすら丁寧な態度でお願いされ、ちまきは思わず「はい」と答えてしまう。

あ、しまった。また安請け合いました。

首ふり人形並みのイエスマンぶりに、自分でも泣きたくなる。

今までこの習性のために、どれだけ痛い目にあったことか……

ローウェイの腰の低さと丁寧さに、警戒心が薄れてしまったことが敗因だろう。とはいえ、承諾したからには受けなければなるまい。

一度交わした約束を破るのは、いけないことだ。なんにしても、元の世界に戻るには彼らの言う通りにしなければならぬと、話の流れでわかった。やるしかない。

「……あの……つかぬことをお尋ねしますが、万が一……そのお願いごとを叶えられない場合……私、どうなりますか？」

どんな内容かはまだ聞いてはいないが、実行できないお願いごとの可能性だってある。

その場合、どうなるのだろう。怖い想像しか頭に浮かばない。

「ああ、ご心配なく。本当に簡単なことです。儀式の際、『誓約の乙女』として立会人になっていただければ、それでよいのです。何一つ、難しいことはございません。できる、できない、という問題ではなく」

「受けるか、受けないか——という、問題だな」

ローウェイの言葉を引き継ぐ形で、リーベルトが続けた。

二人の言い分を聞く限り、無理難題というわけではないらしい。儀式のための生贄になつてくれ！ などというバッドエンド展開もなさそう。

「……あの……受けない、と答えた場合は？」

「その場合は、大人しく帰すわけにはいかねえな」

とても王子とは思えない悪人のような顔で言われてしまい、ちまきは涙目になった。

これは完全に脅おどされている。協力しないと家に帰きさないと、恐喝きょうかくされている。なんたるやり口くちだろうか。まるでヤクザのようだ。

「……………そんな目で俺を見るな」

ばつが悪わるそうな顔で、リーベルトはそつと視線をそらす。悪わるかったと早口で謝あやまられたが、ちまきにはどう答こたえたらよいのかわからなかった。いきなり異世界に連れてこられ、願ねがいごとを叶かなえられなければ元の世界には戻れないと聞きかされたのだ。こちらの気持ちにもなつてほしい。

「だ、だだだだ、大丈夫です。本当に、難しいことは何もありません。ちまき殿はただ儀式に参加し、リーベルト殿下に祝福を授たまけてくださればよいのです。痛いことも怖いことも、ありませんから！」

涙目のちまきにローウェイはひどくうろたえ、安心させるように言った。

「……………それだけでいいんですか？」

リーベルトとローウェイの顔を交互に見て確認すると、二人は力強くうなずいた。

それならば、思ったほど困難ではなさそうだ。

少すしだけホッとしてふと周囲を見回すと、シンの姿が目に入った。

彼はやや離れたところに置かれたテーブルで、一人優雅ゆうやにお茶とお菓子を口にしている。

どうやらこちらの話に飽あきてしまったらしい。無表情のまま、もむもむとリスのように頬を膨ふらませてクッキーを詰め込んでいる姿はシュールだった。

ちまきが呆気あっけに取られていると、ローウェイから声をかけられる。

「さあ、そんな心配そうな顔はおやめなさいませ。あなたのように愛らしい人に、憂うれいの色は似合あいません。笑わらってください、麗うるわしい人」

極上の笑顔を向けられ、乙女の本能で彼に見惚みとれてしまう。しかし次の瞬間、ん？ と首をかしげる。なんだか今、聞き慣れない言葉の羅列られつがあったような。

「うるわしいひと？」

それはどんな食べ物だったかしら……。本気でちまきはそう思った。

思おもってすぐに、違ちがうだろうと否定する。先ほどの言葉が聞き間違いでなければ、彼は自分のことを愛らしいとか、麗うるわしいとか言いっていた気がする。

まさか本気で、この最高級の寶石にすら勝かてそうな美貌びぼうの持ち主が、自分のことを麗うるわしいと評ひするなんてありえない。何かの聞き間違いだろう、きつと。

幻聴げんちょうが聞こえるなんて、思おもっていた以上に混乱しているのね……………てへ。

ちまきは、乾いた笑顔でナイナイと首を横よこにふる。

すると、リーベルトが横よこから口を挟くわんだ。

「まだ話は終わってねえ。勝手に口説くせくな」

「くど……………ッ!? そ、そんな！ わたくしはただ、ちまき殿が元気になれるようにとですわ……………！ 下心したんころもなんてまったくなくない、ピュアな心でちまき殿を！」

けっして邪よこしまな気持こころちはないと言いい募もつるローウェイを無視して、リーベルトはちまきの注意を引く。

「ちまき」

そう呼ばれて、ちよつとだけドキつとした。こんなにかっこいい男の人から下の名前、それも愛称を呼ばれるなんて、初めての体験だった。

ちまつて、なんかかわいい……などと、少しだけ胸の鼓動が高まる。

元の世界に帰れるとわかり、ちまきは先ほどより気が楽になっていた。

「ただ一つ、大きな問題がある」

「も……問題？」

それはいったいなんなのだろうかと、ちまきは緊張した面持ちで続きを待つ。

自分が元の世界に戻れるか戻れないかが、かかっているのだ。その問題とやらの内容次第で、自分のこれからの運命は決まってしまうかもしれない。

元の世界に未練はたつぷりとある。家族と別れたままなんて絶対に嫌だし、来週の日曜日には中学時代からの親友とデザートブッフェに行く約束だつてしていた。

なんの連絡もなしに外泊をするなんて、きつと家族は心配している。

両親は割とのほほんとしているところがあるので、まあ、しばらくは大丈夫かもしれない。しかし、姉想いの優しい弟はひどく心を痛めるだろう。

弟が尋ね人のポスターを作つて町中の電柱に貼りつけている姿が、リアルに想像できる。しょんぼりと肩を落としたながら、目に涙を浮かべてちまきを探すに違いない。

何より、ここは自分の世界ではない。あちらにあるのが、自分の生きていく世界だ。

「も、問題つてなんですか？」

「お前が美人じゃないことだ」

「は？」

ちまきは目と口を大きく開いた。元から丸い目が、さらに真ん丸になる。

どう反応したらいいのか、ちまきにはわからなかつた。美醜の観点から言えば、確かに自分はけつして美人ではない。とはいえ、こうもハッキリ真正面から言われると、面食らつてしまう。

そして、ちまきが美人ではないことに、なんの問題があるのだろうか。

「美人じゃないからやだ」

リーベルトはぼつりと呟いた後に、ため息をつく。

子供か！ ただのわがままか！

口から出そうになつた突つ込みを、なんとかこらえる。

リーベルトさえ納得すれば、どうにでもなることにしか思えない。もっと深刻な問題かと思つたので、ちまきは肩透かしを食らつた。

「いや、まあそこは……」

ちまきはももごと口を開き、リーベルトの名前を呼ぼうと思つて少し悩んだ。同じくらいの年齢だと思うのだが、リーベルトさんと呼ぶべきか、リーベルトくんと呼ぶべきか。

他にならつて、王子や殿下と呼んだ方が失礼にならないのだろうか。

目の前にいるイケメンが王子様だと聞いてもピンとこないのは、あまりにも自分の日常とかけ離れているからだ。日本の皇族ですらテレビの画面越しにしか見たことがないのに、いきなり王子様

ですと言われても現実感がともなわない。

「お前は俺の臣下じゃない。国民でもない。好きに呼べばいい」

ちまきが口ごもった理由を悟つたらしく、リーベルトはそう言ってくれた。

「……………リーベルトくんが我慢してくれたら、いいんじゃないかなあ」

ちまきはドキドキしながら、そう呼んでみた。リーベルトはわずかに目を見開いたが、その呼び方について文句を言うつもりはないらしい。

「……………簡単に言ってくれる。俺の気持ちなんて、お前にはわからない」

すねたように言われてしまったが、それはお互い様だ。なんの前触れもなしに、いきなり知らない世界に連れてこられたちまきの気持ちも、リーベルトにはわからないだろう。

「殿下。わがままを言つて、ちまき殿を困らせるのはおやめなさい。こんなにも可憐なちまき殿に、なんの不満があると言うのです。まったくもって、理解しがたいですよ」

「……………俺はお前の趣味が理解できねーよ」

ぼそりと突つ込むリーベルトに、言葉には出さないがちまきも同意した。少し前に聞いた褒め言葉は、どうやら聞き間違いではなかったらしい。手放しに賞賛されて、照れたり喜んだりする前に、この人の目は大丈夫なのだろうか、それとも頭の方が……………なんて、失礼な心配をしてしまった。

自分は人から美人だと言われる容姿ではない。よくて、人並みだ。

もしも美人だったら、彼氏いない歴イコール年齢なんて記録は打ち出していないだろうし、もっと自分に自信があつて、違う人生を歩んでいただろう。

こんなに美形なのに、趣味はかわつてるんだな……………ちまきは生温かい眼差しでローウェイを見る。ああ、かわいそう……………

「……………ちまき殿。そんな慈愛に満ちた眼差しで、わたくしを見つめないでくださいませ。気恥ずかしくなつてしまいます」

白い頬をほんのりと赤く染め、影ができそうなくらい長いまつ毛を伏せたローウェイは、とてつもなく美しかった。

一方のリーベルトは沈痛な面持ちで、内臓まで吐き出すんじゃないかと心配になるくらい深いため息をついた。そんなに落ち込まなくてもいいのにと、ちまきはげんなりする。

動転した自分を落ち着かせてくれた時、いい人かもしれないと思つた。しかし、やはり第一印象通り、苦手である。理不尽な理由で落胆されるのは、腑に落ちない。

「儀式にはそれなりの準備と、時間が必要だ。そして、儀式を行うのに適した日時というものもある。悪いが、お前にはそれまで待機してもらおう。待機といつても、別に軟禁しようというわけではない。護衛をつけるが、まあ基本的には自由に動いて構わない」

この部屋も好きに使えと言われて、ちまきはギョツとした。

どうやらこのかわいらし過ぎる部屋は、彼女のために用意されたものらしい。

正確には儀式に必要な異界の乙女のため——ではあるだろうが、当面はこの部屋で生活することになるようだ。自分が住んでいる家がまるっと二戸入りそうな広さの部屋を与えられて、ちまきは当惑する。

「ああ、でも自分が異世界から来たとか、俺の客だとか言うなよ。いろいろと面倒だからな。当面は、ローリー……眼鏡かけてたの、いただろ。そいつの遠縁の親戚で、あいつの個人的な客として扱うことになっている。とにかく、余計なことは言わない方が賢明だ」

わかったかと念を押されて、ちまきはコクコクとうなずく。自分が異世界から来たことを外部に知られたくないという意図を、彼の言葉から感じた。

「あ、あの……当面って……どのくらいですか？」

「三日から五日ほどだ。それまでは自由に過ごせ」

ローベルトはそう言って、部屋を出ていった。その際、背中がシヨンボリとしていたのは見なかつたことにする。残されたローウェイはうつとりとした眼差しでちまきを見つめ、ほう……と乙女のごとき吐息を落とす。

そしてハッと自分を戒めるように姿勢を正すと、コホンと咳払いをした。

「ちまき殿。わたくしがいる限り、なんの心配もございません。ちまき殿の生活には何一つ不自由をさせませんので、何か望みがあればわたくしにお言いつけくださいませ。ちまき殿の願いごとでしたら、わたくし……わたくし、なんでも叶えたいと……そう、思っている次第なのです」

キヤツ、言っちゃった！

と言わんばかりに赤く染まった両頬に手を添えて、足早にローウェイも退場する。

なんだか彼の勢いに押されて、ただ言葉を聞いていることしかできなかった。とりあえず、最低でも三日は帰れないことと、自分の生活が保証されていることだけは理解した。

変な人だな……いい人っぽいけど……

ローレンスやローベルトに比べて態度が好意的な分マシだが、変な人という評価はこれから先も揺るがないような気がする。

全員出ていって、部屋は静かになる。

いや、違った。まだ、一人いた。

「もむもむもむ」

いまだにお菓子を咀嚼しているシンが、無表情にこちらを見ている。

まだ彼とマトモに言葉を交わしていないのに、二人きりになってしまった。

ちまきは落ち着きを失う。ど、どうしよう。話しかけるべきだろうか。ちまきが悩んでいると、彼はチョコレート色の大きなクッキーを全部呑み込んで、淡々と言葉を紡いだ。

「俺、シン。よろしく。あなたの護衛するから、そのつもりで」

どうやら先ほどローベルトがつけると言っていた護衛とは、彼のことだったらしい。

身長は彼の方が少し高そうだが、横幅がない分、自分よりも小柄に見える。そんなシンに護衛などできるとは思えないので、おそらく話し相手としての意味合いの方が強いのだろう。

平和な日本で生まれ育ったちまきは、単純にそう受け取った。

「よ、よろしく」

ちまきのいるベッドと彼が座っているテーブルは少し離れていたが、どうにか挨拶を交わす。

彼はお菓子をトレーに載せて、こちらにやってきた。

種類の豊富なお菓子の数々に、ちまきの目は釘づけになる。

数日はかかるが家に戻れるとわかると、一気に食欲も戻ってきた。

「あんたも、食べる？」

お菓子の一つ——マカロンみたいなものを差し出されて、ちまきはおずおずと受け取った。その瞬間、ちまきの中でシンの評価は急上昇する。

食べ物をくれる人に悪い人はいない。これは、ちまきの持論である。幼いころから、食べ物で釣る人間には注意しなさい、誘拐されちゃうから！ と口酸っぱく注意され続けてきたのに、ちつとも効果は出ていなかった。もっともこの時のシンにはなんの他意もなく、ごく普通にお菓子を分け与えているだけだったので、問題はない。

かわいいピンク色の菓子を口に運ぶと、いちごミルクに似た味がした。そのとろけるような甘さに、ちまきの顔がふにゃあと緩む。

「ねえ、聞いていい？」

ちまきが幸せに浸っていると、シンに尋ねられた。

「その髪型。あんたの世界では、流行ってんの？」

一瞬、その言葉の意味がわからなかった。しかしそれを理解した時、ちまきは今までとは違う理由で、卒倒しそうになる。彼女の頭には、盛大に寝癖がついていた。

☆

「ひどい……あんまりだわ……」

ちまきはブツブツと呟きながら、町を歩く。

本日、ちまきはシンとともに、城下町——メイストラシア国王都のメイストラシアにやってきていた。

リーベルトが王子であることは聞いたが、それを実感したのは、外から城を見た時だった。

ちまきに与えられた部屋は、充分過ぎるほど広かった。しかし、あの部屋を有することができる城の規模を甘く見ていた。

石造りの城は、前にテレビか何かで見た中世ヨーロッパのお城に通じるものがあつた。何部屋あるか、リーベルトでさえ把握していないという。それに、広大な庭。

ドンジョンと呼ばれる城中心の塔には王族たちが住み、その塔を囲む形で八つの塔が建てられている。周囲にはぐうーつと庭が広がり、すべての敷地を取り囲む城壁が高くそびえる。そしてその城壁自体が、王宮に勤める者たちの居住空間になっていた。

無論、外敵の攻撃により居住空間が一発でやられてしまわないように、壁はそれ相応の厚みがある。さらに、壁には幾重にも結界が張られているのだという。

まだちまきは見ることがないけれども、この世界の住人のごく一部は、結界などの魔術を使うことができるらしい。

ちまきをこちらの世界に呼び寄せたのも、ローウエイが使った魔術である。

城壁の外側には壕さうと呼ばれる深い溝みぞが掘られ、ちよつとした川のようになっている。

城門と壕の間には跳ね橋がかかっており、出入りする人間を厳しく管理しているのだ。

ちまきはシンがそばにいる限り、城へは自由に出入りできる。ちまきの護衛役を請け負っているシンは、王子であるリーベルトとも気安い関係のようだったし、若いながらも信頼された臣下なのだろうと、ちまきは感じていた。感情の起伏きふには乏しいが、彼は割と話しやすい相手で、ちまきは助かっている。

城は小高い丘の上に建てられており、跳ね橋の外にある城下町までは馬車を使って移動する。生まれて初めて馬車に乗ったちまきは、思った以上に揺れるその乗り心地に驚いた。王都は国の豊かさを誇るように大変活気に満ちあふれており、どの店も客と商売人たちで大賑わい。

ちまきたちを城下町まで届けてくれた馬車は、時間になれば迎えにきてくれることになっている。ぶつくさ呟つぶやくちまきに、シンが声をかけた。

「ドンマイ。ファンキーだった。たぶん」

「……慰めなんかいらねえもん。シンくんにはわからないわよ、傷ついた乙女の気持ちは。あんな姿をずっと見られていたなんて……最悪だ……死にたい」

「儀式が終わるまではできないけど、終わってからなら手伝ってあげようか」
「嘘です。冗談です！」

淡々とした口調がなおさら本気のように感じられて、怖い。やだ。この子、怖い。

まだ出会って二日しか経っていないが、とりあえず悪い子ではなさそうだとすることはわかって

いる。逆に、それ以上のことは知らない。

少し前を歩くシンを追いかける形で、ちまきはちよこちよこついでいく。

シンは雑誌を読みながら、器用にも人ごみをすいすい歩いていく。対するちまきは、ちゃんと前を向いて歩いているのにやたらと人にぶつかってしまい、始終、ぺこぺこ謝ってばかりだ。

ほんの少しではあるが、シンとちまきの間には距離ができていく。

話す分にはさほど問題ないので、別にいいのだが。

「……………はあああ」

ガックリとうなだれながら、ちまきは商店の立ち並ぶ広場を歩く。

様々な店が並ぶその広場は、王都の中で最も賑わっている場所だった。

さて、ちまきが落ち込んでいるのは、二日前のできごとがきっかけである。

つまり、ちまきが自分の置かれている状況を理解した日のこと。

あの日、シンに指摘されて初めて気づいた自分の恰好。羽織はおりついていた半纏はんてんは脱がされていたが、着ていたジャージはそのままだった。まあ、ジャージの方は五十歩譲って、目をつぶろう。むしろ知らない間に脱がされていた方が、問題である。嫁入り前の大事な身体なのに。

ちまきが落ち込んでいる原因は、首から上にかけてである。シュシュで前髪を上げていたのだが、眠っている間にシュシュが取れてしまっていたらしく、前髪を結んでいた形で、クッキリと寝癖がついてしまっていた。髪を結んだまま眠ったことがある人ならば理解できるだろうが、できた寝癖は目も当てられないものになっていた。

ロングヘアの手入れ方法として、緩く結んで就寝するという方法はあるらしい。しかし、ちまきの場合には邪魔な前髪を上げていただけ。何も考えずにギョッとシユシユで結んで束ねていた。そのため、やや重力に負けた形で垂れ下がりがつつ、前髪はミヨンと前に飛び出してしまった。当然のように、処理していない眉毛も丸見え。そしてノーメイク。

あんな姿をずうっと初対面の殿方たちに見られていたのかと思うと、ちまきの乙女心はクリティカルヒットを受けて瀕死状態だった。

「そんなに気にすることない。面白かった」

慰めてくれているらしいが、まったくもってフオローになっていない。

けれども気遣いが嬉しかったので、ちまきはため息まじりにありがとうと答えた。

現在、眉毛だけは部屋の鏡台に入っていたエチケット道具でこっそり処理しているけれども、ちまきはスツピンのまま往來を闊歩していた。最初にあの状態をさらしてしまっているので、今さら取りつくりう気になれなかった。

洋服は、部屋に用意された山のような衣装の中から借りたものだ。

桜もち色の薄生地を何枚も重ねて作られた足首丈のワンピースは非常にかわいらしく、ちまきの乙女心をくすぐった。頭に巻いた布リボンもアクセントになっている。

「今日はどこに行く？ せっかくだから、観光を楽しめばいい」

部屋にいても鬱々とするだけだと、シンは外に誘ってくれた。

ちまきだけだったら、何が起こるかわからない外になんて、怖くて出かけられなかっただろう。

知り合って間もない相手、さらに年下だけれども、誰かと一緒にいるというのは、それだけで心強いものだった。

シンの手には、この町の観光雑誌が握られていて、主に食べ物関係のページにチェックが入っている。ちまきはこちらの世界の言葉を読んだり話したりする分には不自由しなかったけれど、読むことはできなかった。よって、なんと書かれているのかさっぱりわからない。

雑誌のページをチェックしたのは、シンである。ちまきの観光案内と称して、シンの方が楽しんでいるような気もしないではない。ちまきは、まあいいかと苦笑した。実弟とはまったくタイプが違うものの、シンのことを弟のように感じて、少しだけ微笑ましい気分になる。

ちなみにリーベルトとローレンスは寝癖をさらした日以来、ちまきの前に姿を現していない。一方のローウェイは、なんだかんだと部屋にやってきては、いろいろなプレゼントを贈ってくれる。ちまきはありがたいと思う以上に、申し訳ない気持ちでいっぱいになった。

もううばかりで、何も返せないのがちまきには辛い。けれど断ると、ローウェイが非常に悲しそうな顔をする。そんな顔を見るのも忍びなく、受け取る他になかった。

護衛という立場上、シンは常に一緒に行動してくれている。彼はちまきにとって、現在一番身近な人間である。こうやって日中はほぼ一緒にいるし、ちまきの就寝前にも様子を覗いてくる。

シンが年下ということもあり、寝室をのぞかれてもさほど気にならなかった。

本人が淡々とした人物であることも、気にならない要因になっているのかもしれない。

それにしても、未成年であるシンがフルタイムで働いているのは、いかがなものだろうか。

日本だったら、間違いなく労働基準法に引っかかっている。しかしこの世界の住人には、シフト制とか労働基準法とかいう概念はないらしく、普通に受け入れている。

やはり感覚の違いというのは、あるようだ。生活環境が違えば、常識も違う。

シンには悪いと思う一方、何もかもわからない異世界で、仕事とはいえ自分に心を砕いてくれる人間がいることは、ちまきの慰めにもなっていた。

「ちまき。ここ、かぼちゃプリンがすごく美味しい。行く？」

雑誌のページを見せられ、おいしそうなプリンの画像にちまきの目が輝いた。

見るからに濃厚そうなかぼちゃプリン。その上には、たっぷりの生クリーム。添えられたハーブの緑がアクセントになっている。

それはもう、食べて食べてと誘っているようにしか見えなかった。

「行こう、シンくん」

グツと拳を握り、ちまきは力強くうなずいた。シンも、まるで戦場に向かう兵士のような気合の入った瞳で……表情に一切の変化はないが、瞳にだけ力を宿して、首を縦にふる。

「話がわかるな。俺のマリーと一緒に菓子を食ってくれないから、そこが不満だ」

マリーというのは、シンの彼女らしい。彼に恋人がいると聞いた時は、心底ビックリしたものだ。正直、彼が色恋に興味があるなんて思わなかった。

まだ実際に会ったことはないが、シンの口からたびたび名前を聞くので、二人の関係は良好なのだろう。

「この店、少し歩くと、構わないか？」

「もちろん。かぼちゃプリンのためなら」

これ以上ないくらいキリつとした顔で、ちまきは答える。

二人並んで店へ向かいながら、ちまきは興味津々に周囲を見て回った。

日本では見たことがないような店、建物、住む人々に、ちまきの好奇心は刺激される。

着ている服、肌や髪の色などはまったく違うが、食べ物には日本人が一般的に食べているものと、ほとんどかわりがなかった。

たまに料理名のわからないものもあるが、ちまきの舌には合っていた。

食べ物はおいしいし、部屋は広くてかわいいし、洋服はどれもおしゃれ。日中はシンと観光と称した食歩き、夜は天蓋つきのふかふかベッドで就寝。

家族に連絡ができなくて心配をかけていることを除けば、夢のような生活だった。

そんな恵まれた環境にいるからには、ちまきは課せられた使命を果たさなければならない。

ちなみに、ちまきたちが買い食いしているお金は、ローウエイを通してリーベルトから出ているらしい。渡された財布をのぞき込んだシンは、無表情ながらも目は輝き、テンションが上がっているように見えた。おそらく、なかなかの金額が入っていたのだろう。金のありがたみを、ひしひしと感ずる。お金持ち万歳。王子様万歳。

「あ」

シンが何かに気づいたように、小さく声を上げた。

「どうしたの？」

ちまきは足を止めて、自分ときほど身長のかわらないシンを見る。

表情に変化は見られなかったが、ほんのわずかだけシンは困っているように感じた。

「困った。これ、販売数限定商品だ。早く行かないと、売り切れてしまう」

雑誌を眺めながら歩いていたシンは、目当ての商品が毎日百個しか販売されないという情報に、

「困った困った」とぼやいている。

「なら、早く行こうよ。急げば、まだあるかも」

ちまきはここで立ち止まるより、もっと急げば間に合うかもと前向きな案を出す。

だがシンは首を左右にふった。

「ここから、まだ距離がある。ちまきの足じゃ、たぶん、間に合わない」

「そ、そうっ？」

なら、諦めるしかないのかしら……

確かにちまきは鈍足である。走ったところで、大した速度は出ない。

すぐく食べたかった、とちまきは残念に思う。そして今日がダメなら明日は早く行けばいいかと思ひ直した。

一方、シンは少し思索し、ちまきに視線を寄越す。真つ黒な目が、ジツとをこちらを見つめている。

「ちまき。あそこの軒下、ちようど日陰になってる。そこで待ってて。俺、走って買いに行く」

ひとつ走りして買ってくると言うシンに、ちまきは、え!? と目を見張った。

「きよ、今日、無理して買わなくても明日でいいんじゃない？」

「ちまき」

じっと、シンが再び視線を合わせてきた。先ほどよりも、幾分か真剣な眼差し。

この子はすぐく真つ直ぐに——容赦なくこちらを見てくるなど、ちまきは思った。

「今日できることが、明日できるとは限らない。今日できることは、今日しておかないとできなくなった時に後悔する。楽しいことならなおさら。先延ばしになんかして、できなくなった時に悔やむのはつまらない」

ちまきはキョトンと目を丸くする。

ほんの少しだけ、ドキリとした。それは恋のトキメキとか、そういう類のものではない。

なんと表現していいかわからないけれども、心の奥へスツと入り込んでくる眼差しに、意表を突かれたような気がした。

「ちまき、待ってて。すぐ、戻ってくる。変な人についていっちゃダメ。あと、お菓子をくれる人がいても、ついていっちゃダメ」

真面目な顔で念を押されて、ちまきは苦笑を浮かべながら首を縦に動かした。

ちまきの反応を見て満足そうにならずくと、シンは疾走した。

ちまきはその速さにビックリする。

まるで風のように、人ごみの中を駆け抜けていってしまったのだ。

ちまきが瞬きをすると、彼の姿はまったく見えなくなっていた。

「すごい」

ちまきは感嘆の息を吐き、シンの言葉に従った。ぼてぼてと歩き、彼の示した店の軒下で一休みさせてもらう。

近くでは子供たちが走り回り、ゴムで作ったパチンコ銃で遊んでいる。そういえば、弟も小さいころはこういう遊びをしていたなど、微笑ましくなる。今ごろあの子は何をしているだろうかと考えて、頭を小さく左右にふる。少し考えただけで、会いたくてたまらなくなった。

ちまきは友達や家族のことが好きだったが、中でも格別に弟のことが大好きだった。

世界で一番かわいいものはなんですかと尋ねられれば、弟だと即答できる。

年が離れていることもあるだろう。それに、あんなに真っ直ぐ自分を慕ってくれる弟を嫌える姉などいないだろうと、常々思っていた。篠原家姉弟のことを知っている人間からは、よく相思相愛姉弟と言われたものだ。

「……お姉ちゃん大好きって、言われたい」

考えないようにしつつも、思わず願望が口からこぼれて、少しの間しよげ込んだ。きつとあの超かわいい弟ならば、再会した時に姉の願いを叶えてくれることだろう。

はふんと息を吐いて、ちまきはぼんやりと町の様子を眺めることにした。

町は、本当に色んな人で賑わっていた。露店には野菜や果物が並び、元気のよい親父さんやらかみさんやらの呼び込みの声、料金を値切るお客の声が響いている。

みんな元気で、町全体に活気があるのを感じた。いい町だなあと思う。

しかし、それにしても。

「気のせいかな、みんな細い気がする。しかも、足が長い」

おまけに、腰の位置が違う……などと、ちまきは我知らず沈んだ声で呟く。

この町に遊びに来た時からうすうす気づいていた事柄ではあったが、この町に住む人たちはみな細身——少なくともちまきのようにぼつちやりとした体型の人は、あまり見かけないような気がする。リーベルトたちみたいにスタイルまで完璧な規格外の美形はいないものの、道行く人々はすつきりした体型をしていた。

しかも男女ともに、身長が高い。目算ではあるが、ちまきと同じ年頃の女性は、平均で百七十前後はありそうだ。男性はもつと高い。リーベルトたちはずいぶん長身だと思っていたが、こちらでは割と平均的な身長なのかもしれない。いや、しかし、あの手足のバランスなどを考えると、やはり彼らは規格外な気がする。特にリーベルトは、若く雄々しい筋肉まで持っているのだ。

ムキムキではない、あの絶妙なラインが……本当に、たまりません——などと、筋肉が好きな女子ならば思うことだろう。場合によっては、男子も思うかもしれない。

ちまきは自分をぼつちやり系だと自覚していたが、もしかしてこの世界では立派な……

「……………デ」

思わず呟きそうになった禁断の二文字が自爆ワードであることに気づき、即座に口を閉じる。

ダメだ。言葉にして認めたら、心がポキッと折れてしまいそう。